台大日本語文研究第 23 期
2012 年 6 月，頁 243-266
2011-10-30 收稿，2011-12-23 通過刊登

被稱為魔王子孫的一族
——解讀安藤氏族譜——

永井隆之*

摘要

安藤氏在戰國時期支配北奧羽、蝦夷島一帶，在族譜「下國家譜」裡，以天皇朝臣的姿態以示其正統性。除此之外，忤逆天皇等強烈的反朝廷意識這點亦眾所皆知。研究史上，從安藤氏的「下國家譜」裡由以下幾點可看出其反朝廷意識：一、第六天魔王爲安藤氏的始祖。二、預言天皇家到一百代後將滅亡的「百王說」。本稿將此族的反叛意識重新解讀，並將相互對立的正統意識跟反叛意識重新解釋使其兩者在意義上於族譜裡皆能兼容並立。

就結論來說：前述第一點的地方，比起被神佛守護的天皇（統治天下者），安藤氏認爲只要是自己的族人就擁有來自魔王的天下統治權；而第二點的部分，最後闡明了「百王說」與魔王的子孫安藤氏之間的關連性。

綜合以上的檢討，探討「下國家譜」裡記述朝廷敵人的歷史的理由。然其原因爲從天皇統治下獨立出來的人，將自己的自由意識徹底化爲行動，結果維持了「日本國」的秩序，其實是因爲內含了正統性的理論而造成這樣的結果。

關鍵詞：安藤、第六天魔王、百王說、天皇、族譜

* 國立政治大學日本語文學系助理教授

The Clan who Called The Descendants of the Devil King -About of the Ando Clan's Genealogy-

Nagai, Ryuji*

Abstract

The Ando clan took control of the Northern OuShu and Ezogashima. In their genealogy -'Shimokunikahu', not only be famous of their consciousness with validity as the retainers of Emperor, but also the rebellious consciousness to Emperor were. When their rebellious consciousness was mentioned, we thought about: (1)The contents about the Ando clan was founded by the devil king of the sixth heaven. (2)In 'Hyakuousetsu', they predicted that the Emperor's family would be retained until the reigns of one hundred Emoerors.

In conclusion, they thought about that was given status potentially holding the right to rule Japan.Besides, they cause to change position to the orthodoxy disadvantage. Because of having the logic with validity, they independent from the reigns of Emperor made their own free will totally in consequence of keeping the peace in Japan.

Keywords: Ando, Devil king of the sixth heaven, Hyakuousetsu, Emperor, genealogy

* Assistant Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Chengchi University

魔王の子孫を称する一族
――安藤氏の系譜認識について――

永井隆之*

要旨

戦国期に北奥羽を支配した安藤氏。この一族の系図「下国家譜」には、天皇の廷臣としての正統意識だけでなく、天皇に反逆する朝敵意識がみられることで知られる。研究史上、「下国家譜」における安藤氏の朝敵意識とは、(1)安藤氏の始祖を第六天魔王とする内容がみられる点、(2)天皇家が百代で滅亡することを予言する百王説がみられる点にあるとされる。本稿では、「下国家譜」の反逆意識に関する記載を読み直し、正統意識と反逆意識という、相反する意識が一つの系図に両立しうる論理について検討した。

その結果、(1)については安藤氏が魔王の天下統治権を潜在的に有する者として位置づけられていたこと、(2)については、百王説が魔王の子孫としての安藤氏にかかわるものであったことを明らかにした。

以上の検討を踏まえ、「下国家譜」に、朝敵の歴史が記される理由について検討した。それは、天皇の統治権から独立した者が、自由意志を徹底化することで、結果として「日本国」の秩序を維持するようになるという、いわば反逆者が正統を支える論理が内在していたからであった。

キーワード：安藤、第六天魔王、百王説、天皇、系譜

* 国立政治大学日本語文学科助理教授

魔王の子孫を称する一族
——安藤氏の系譜認識について——

永井隆之

一、はじめに

津軽・十三湊を拠点とし、北奥羽・蝦夷島を支配した安藤（安東）氏。その安藤氏には数点の系図が残されているが、その内、中世末から江戸初期にかけて作成された陸奥三春秋田家の「秋田家系図」[1]と、松前藩家老下国家の「下国伊駒安陪姓之家譜」(「下国家譜」)[2]は、彼らの特異な系譜認識が窺える史料として知られる。

その特異さとは、これら系図に、天皇を正統な君主とする秩序に反逆する意識（朝敵意識）と、その秩序を支える、あるいはそれに参与する正統意識という二つの相反する意識が見出される点にある。

本文末の【表Ⅰ】と【表Ⅱ】を参考にその一端を紹介すると、反逆意識にかかわる内容としては、神武天皇によって外浜に追放された安日（安日長髄）を安藤氏初代とする点や、安倍頼時・貞任などの「朝敵」と密接なかかわりを有する点があげられ、一方、正統意識にかかわる内容としては、大彦命系安倍氏（安倍仲麻呂や広庭）と同族たることを強調する点や、朝廷と関係を有し、大納言に任官

---

[1] 本稿が使用する「秋田家系図」は三春藩の秋田家系図群の内、万治元年（1658）に秋田実季が作成した系図を基礎とするもの。この系図は、伊勢国朝熊に蟄居中であった実季が、『寛永諸家系図伝』編纂用に幕府に提出された子の俊季作成の系図を正すためにつくられた。東北大学附属図書館蔵『秋田家文書』所収。翻刻や解題については『青森県史』資料編中世二（2005年）を参照。

[2] 本稿で利用する「下国伊駒安陪姓之家譜」(「下国家譜」) は系図末尾に元禄六年（1693）の事跡が載せられていることから、遅くとも十七世紀末に作成されたことが指摘されている。八戸藩南部家中の湊家（安藤氏一族）に伝存した『八戸湊文書』(東京大学史料編纂所架蔵影写本) 所収。翻刻については、佐々木孝二編『総合研究津軽十三湊』(北方新社、1988年)、『新編弘前市史』資料編一古代・中世編（1995年）を参考。この「下国家譜」の同系統本として、松前藩家老下国家に伝存した写本「下国伊駒安陪姓家之記録」（函館市立図書館蔵、北海道県立図書館蔵）が知られる。これは宝暦十年（1760年）までの系譜を書き加えたもの。解題については、平川新「系図の成立と家の交流」(渡部治雄編『文化における時間認識』角川書店、1993年)、『青森県史』資料編中世二（2005年）を参照。

したとする点があげられる。

この反逆意識と正統意識という、二つの相反する意識が一つの系図に共存することをどのように理解すればよいのか。これまでの研究では、二つの意識のうち、安藤氏の反逆意識を重視し、系図における反逆意識と正統意識との関係について検討されてきた[3]。

その代表的見解を二つ紹介しておく。一つは、反逆意識と正統意識との関係を前者から後者への変化と捉え、それを戦国乱世から天下統一へと変化する社会情勢に即して論ずる研究[4]、もう一つは、二つの意識を同時代的なものと捉え、境界権力たる安藤氏がそれらを使い分けたと指摘する研究である[5]。

これらの説は、安藤氏による北奥羽・蝦夷島支配の実態をふまえて、二つの意識の関係を解こうとしている点に特徴があり、示唆に富む指摘もみられる。だが、これらの説で問題となるのは、二つの意識が一つの系図に共存するために必要な、両者の論理的関係が明確になっていないということである。

本稿ではまず、安藤氏の系図の内、特に「下国家譜」の記載を読み直し、「下国家譜」における反逆意識と正統意識とが、系図において互いに影響しあう一体のものであることを確認したい。その上で、相反する二つの意識が一つの系図に両立しうる論理について検討したい。

二、下国伊駒安陪姓之家譜の検討

安藤氏の系図のうち、「下国家譜」には、「秋田家系図」にはない極端な反逆意識がみられるという。その特徴としては（一）安藤氏

---

3 外山至生「中世『蝦夷支配』の変遷と津軽安藤氏の展開」（『北奥古代文化』13号、1982年）、大石直正「中世奥羽と北海道」（北海道・東北史研究会編『北からの日本史』三省堂、1988年）、平川新「系譜認識と境界権力」（『歴史学研究』647号、1993年）、斉藤利男「中世エゾ観における『正統と異端』」（羽下徳彦編『中世の政治と宗教』吉川弘文館、1994年）、入間田宣夫「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（『中世武士団の自己認識』三弥井書店、1998年）。

4 入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）。

5 平川「系譜認識と境界権力」（前掲）。

の始祖を第六天魔王とする点[6]、（二）天皇が百代で滅ぶという百王説がみられる点[7]があげられている（本文末【表Ⅰ】【表Ⅱ】を参考）。

これらの特徴は、系図における反逆意識と正統意識との論理的関係を考察しようとする本稿に、格好の材料を提供してくれることになろう。そこで本稿ではまず、（一）（二）の内容を詳しく検討し、「下国家譜」の反逆意識のあり方について明らかにしておきたい。

（一）第六天魔王を始祖とする点について

安藤氏の始祖を第六天魔王とする内容については、次に引用する「下国家譜」の安藤氏初代「長髄」の項に記されている。

【史料一】

（前略）安日長髄第六天魔内臣・二男・下国伊駒安東太・蛮醜大日本国地神五代鸕鷀草葺不合尊之御宇、欲界第六天主他化自在天王今按、変化下界天衆他而、受用之故、号他化自在天云々、欲使内臣天魔二男安日長髄変化、領自礙島、降住豊蘆原中津国。故長髄号下国、称第六天魔王孫。曰大日本国者欲界下為我領地。与神武天皇互争国。神武天皇者是天神七代地神五代之正統而、相伝相続之御領地也。然長髄振猛威。（中略）安日長髄籠大和国伊駒岳、既為日本之大魔王也。神武天皇御宇三十三年、名蘆原国、号秋津島、五十九年己未、天皇従日向州吾田邑東征、都大和国畝傍山住橿原宮。時登兵自攻伊駒岳、一戦功成。遂虜安日、改其名於蛮醜、宥死罪、被遠流東奥都遐流卒都破魔今書津軽外浜貶謫蟄居之地者安東浦。自此長髄号安東太、其孫代々相続為通称。人王十六代応神天皇御宇、謂安日、号日下也。

引用史料には、安藤氏の初代にあたる安日長髄の事跡が記されている。これによると、長髄は第六天魔王の二男、内臣であったとされる。豊葦原中津国を領さんとする魔王が長髄に変化し、地上に下る。安日長髄は第六天魔王の孫と称し、日本国の領有をめぐり、神

[6] 斉藤「中世エゾ観における『正統と異端』」（前掲）、入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）。

[7] 平川「系譜認識と境界権力」（前掲）、入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）。

武天皇と戦う。日本の大魔王として生駒山に籠もるが、ついには神武に捕まり、名を醜蛮と改められ、津軽外浜の安東浦に流されたと伝える。

ここに現れる安日とは、「下国家譜」では長髄と同一人物とされるが、兄弟とみる史料もある(「秋田家系図」)。長髄は記紀に見られるが安日は見られない。中世の説話・注釈の世界では、安日は、神武天皇以前に日本を支配した「王」であり「神」である。神武に敗北し、奥州夷（醜蛮）の祖となったと伝える。

安日とは、その登場の初見とされる鎌倉末成立の妙本寺本『曾我物語』巻第一によると、安日が神代に「鬼王」として「七千年」間日本を支配し、神武によって外浜へ追い出され「醜蛮」(「エソ」とルビあり）となったとある。中世末筆写『職原抄聞書』の注釈には「安日長髄」は「天照太神」が現れる以前に日本におり、「君臣の道」を弁えなかったので、神武に退治され、「奥州の夷の祖」となったと伝える。また、『長恨歌伝一巻付長恨歌一巻・琵琶行一巻・邪馬台一巻』の欄外注によると、「神武」がいまだ即位せぬ頃に、安日と長髄「尊」が「天下を統領」しており、「神武」の東征によって安日は夷島に退き、長髄は生駒岳で殺されたという。これらのことから、説話や注釈の世界における長髄は、天神として天照統治以前に日本を統治し、後に神武に退治された元日本の王と位置付けられていたことが指摘されている[8]。

次に、第六天魔王とは、記紀を仏教的世界観で作り直した中世版「日本紀」(中世日本紀）に登場する神のことである。欲界の頂点たる他化自在天にあり、衆生の存在する欲界以下の世界に君臨する王といわれる。諸説あるが、天竺の東北・伊舎那天を支配する伊舎那天・伊舎那后の二神のこととともいい、伊弉諾尊・伊弉冉尊に垂迹した神ともされる。また、大日如来の変化した天照が日本を作る際、「仏法国」にしないという嘘を信じて国を譲った者であるとの伝え

[8] 安日については、入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）を参考にした。

もある（『中臣祓訓解』『高野物語』『沙石集』『御遺告随筆』）[9]。このことから、第六天魔王は仏教世界観の中で、天照や天皇よりも古くかつ強力な天下統治権者、いわば「主権者」と位置づけられている[10]。また、第六天魔王は、『太平記』巻十六「日本朝敵事」[11]によると、平将門・安陪貞任・宗任・平清盛らをおさえ、「朝敵の筆頭」にかぞえられる存在であったことも知られる[12]。

このように説話や注釈書の中で、「日本」の元の天下統治権者「朝敵」として共通の性格を有する安日長髄と第六天魔王は、東北地方に安日の説話が流布していること、第六天魔王の伝説が魔王を祀る神社の存在など関東・東北に分布していることから、密接な関係を有していることが指摘されている[13]。これが「下国家譜」において安日が魔王の変化した者であるという話の下敷きになっているという[14]。

ただし、第六天魔王の存在価値は、天皇よりも強力な天下統治権者、あるいは「朝敵の筆頭」という点にだけあるわけではない。【史料一】の「長髄」の項に「今按づるに、下界天衆他を変化して受用する故、他化自在天と号す」とあるように、中世では第六天魔王が欲界の衆生を惑わし、憑依して魔王の眷属とし、衆生の成仏を妨げる、つまり人を欲まみれにする者とも考えられていた。例えば、文永十二年（1275）四月十六日付の日蓮書状には、「此の世界は第六天

---

9 第六天魔王については、伊藤聡「第六天魔王説の成立」(『日本文学』44 巻、1995 年、後『中世天照大神信仰の研究』法藏館、2011 年に所収）を参考にした。

10 第六天魔王の性格に「主権」という用語を用いて説明しているのは、弥永信美「第六天魔王と中世日本の創造神話」上（弘前大学『国史研究』103 号、1998 年）、「同」中（弘前大学『国史研究』105 号、1998 年）、「同」下（弘前大学『国史研究』106 号、1999 年）。その他、「日本国の所有者」、「主」などの表現を用いているのは、新田一郎「虚言ヲ仰セラルヽ神」(『列島の文化史』6 号、1989 年）、伊藤聡「第六天魔王説の成立」（前掲）など。

11 『太平記』二（『日本古典文学体系』35 巻)。

12 入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）。

13 新田「虚言ヲ仰セラルヽ神」（前掲）。

14 入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）。
補注：「下国家譜」にみられる安日を魔王子孫とする言説については、「日本百姓縁起系図」が参考にされているとの指摘がある。佐々木紀一「安日説話の展開―真名本『曾我物語』揺蕩―」(『国語国文』75-12、2006 年)。

魔王の所領なり、一切衆生は無始以来魔王の眷属なり、（中略）貪・瞋・癡の酒をのませて、三悪道の大地に伏臥せしむ」、あるいは「此は第六天の魔王か智者の身に入て、善人をたほらかす也」とある[15]。このことから、第六天魔王の天下統治権とは、天皇のそれに勝るとも劣らず古くかつ強力であったというだけでなく、私欲に憑かれた人々を支配する天下統治権、いわば欲望の天下統治権ともいうべき性格を有していたことが窺える。これは、九世紀以降「十善帝王」（不殺生・不倫盗・不邪淫・不妄語・不悪口・不両舌・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見の十戒を守った者が転生した君主）といわれた皇孫たる天皇[16]が仏神に守られながら人々を支配する天下統治権、いわば禁欲の天下統治権と対抗するものである。

これらのことを踏まえると、「下国家譜」にて第六天魔王が安藤氏の始祖とされていたのは、天皇に対して反逆し、敗北した王の子孫（あるいは神の子孫）である安藤氏に、天皇の禁欲の天下統治権よりも魔王による強力な欲望のそれが潜在的にあることを示すためであったと考えられる。ここに安藤氏の反逆意識が表れていよう。これは先学の主張する通りであるが、ただそれはあまりに強烈なものであったのである。

（二）百王説がみられる点について

百王説とは、予言書「邪馬台詩」の一節「百王の流れおわりつき」から派生した、皇統が百代で断絶するという考え方である。それが「下国家譜」においても取り入れられているという。具体的には、①「長国」の項（本文末【表Ⅰ】を参考）にある「安陪仲丸」（安倍仲麻呂）にかかわる伝承が、同じ伝承を有する『江談抄』「吉備入唐間事」にある「邪馬台詩」と関連があるということ[17]、②初代「長髄」の項にかかわる安日の説話が「邪馬台詩」（『長恨歌伝一巻坿長恨歌一巻・琵琶行一巻・邪馬台一巻』）の本文の欄外に記された注（欄

[15] 『鎌倉遺文』16巻、1－871号。
[16] 田中徳定「『十善の君考」（『古文学の領域』新典社、1996年）、大津雄一「軍記の始発」（『軍記と王権のイデオロギー』翰林書房、2005年）。
[17] 平川「系譜認識と境界権力」（前掲）。

外注）にもみられること[18]、③長国の後代「盛季」の項（本文末【表Ⅰ】を参考）に、盛季を「長髄百代之後胤」とする記載があること[19]があげられている。ちなみに③「長髄百代之後胤」の記載については、「皇統百代の断絶を指折り数える」「天皇家に代わる正統的存在」となるという意識がみられるとまで指摘されている[20]。これら①から③の指摘によって、「下国家譜」に百王説が取り入れられているという見解は定着しているようである[21]。

本稿も、「下国家譜」の作者が「邪馬台詩」から影響を受けていたと考える。そして「長髄百代之後胤」とあることから、長髄と対抗した神武の子孫・天皇家が百代で滅びるという百王説を十分理解していたと思う。だが、百王説を取り入れて天皇家の滅亡を期していたかというと、それには疑問を感じざるをえない。「下国家譜」には百王説をふまえた別の主張がみられるのではないか。そのことを先の③の指摘にかかわる史料を検討していくことで明らかにしたい。まず、「盛季」の項を次に引用しておく。

【史料二】

盛季安藤太津軽十三湊

安大納言

長髄百代之後胤也。為婿南部大膳大夫源義政処、来十三湊、対面盛季。帰而後義政廻謀略、攻破十三湊、乗取津軽。故嘉吉三年十二月十日、盛季逃渡狄之島松前也。

引用史料によると盛季は長髄から数えて百代目にあたるという。彼は、婿である南部義政の奇襲を受け、津軽支配の拠点としていた十三湊を奪われ、松前に逃げ渡ったという。

これまでの研究では、この「盛季」の項に、百王説がみられる証

[18] 入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）。
[19] 平川「系譜認識と境界権力」（前掲）。
[20] 平川「系譜認識と境界権力」（前掲）24 頁。
[21] 小峯和明『『邪馬台詩』の謎』（岩波書店、2003 年）。その他、佐藤晃「北奥地域権力の境界性と自己認識」（『説話文学研究』33 号、1998 年）、秦野裕介「津軽安藤氏における『長髄百代後胤』観の形成について」（『新しい歴史学のために』225 号、2002 年）を参照。

拠として、その文中に「百代」とあること、また、盛季以前の代には天皇の代数が明記されているが、それ以後には記されていないことが指摘されている（本文末【表Ⅰ】を参考）[22]。

だが、「百代」とは、【史料二】の「長髄百代之後胤」を参照すれば、始祖安日長髄から数えて百代目の子孫という意味であるから、天皇にかかわるものではなく、盛季自身にかかわるものである。

そして、この「百代」とは、「盛季」の項が安藤氏の津軽支配の拠点たる十三湊を喪失する内容であったことを踏まえると、天皇家ではなく、安藤氏の衰退を示す象徴的な言葉であったと考える。

このことは、盛季から数えて四代目の「政季」の項（本文末【表Ⅰ】）を参照すると、より明確になる。ここには、盛季なき後、彼の孫の義季が生害することで「惣領家」が「断絶」し、庶流の政季が惣領を継いだと記されている。

これらのことから、「百代」とは、盛季から始まる安藤惣領家の衰退、滅亡を予感させる象徴的な言葉であり、長髄から始まる魔王の一族としての反逆・朝敵の歴史に終止符が打たれたことを示すための言葉であったと考えられる。よって、「皇統百代の断絶を指折り数える」という意識、つまり百王説をここから窺うことはできない。

また、盛季以前の代には天皇の代数が明記され、それ以後記されないことについては、盛季が初代天皇の神武と戦った長髄の「百代之後胤」であることを印象付けるためであったと思われる。その証拠に、天皇の代数は盛季の父貞季の代までしか記されていない（本文末【表Ⅰ】を参考）。

では「下国家譜」において天皇家の百代はどのように位置づけられていたのだろうか。「長髄百代之後胤」に魔王の一族の衰退・滅亡が象徴されていたことを踏まえれば、それとは逆の意味が見出されよう。すなわち、天皇家の百代には、百王説を克服してあらわれるという、天皇家の永続性を強調する祝儀の意味が含まれていたので

[22] 平川「系譜認識と境界権力」（前掲）。

はないか[23]。

これら検討の結果、「下国家譜」には、百王説の影響がみられるものの、百王説そのものを見出すことはできなかった。むしろ、魔王の化身たる「長髄百代之後胤」の滅亡を描いている点で、第六天魔王の子孫たる安藤氏にとっての百王説、いわば魔王百王説がみられることがわかった。この魔王百王説は、安藤氏が天皇を正統な君主とする秩序に反逆する立場から、天皇家の秩序を支える立場となったことを明確に位置づけるために、百王説をたたき台として新たに生み出された論理であったと考えられる。

さて、このように位置づけると、ある問題が生じてくる。それは、なぜ「下国家譜」には、安藤氏が天皇を支えるようになったという記載だけでなく、かつて反逆者であったという記載も――しかも朝敵の最たる第六天魔王の子孫であったという記載まで――みられるのか、ということである。本稿の最初の問いである「下国家譜」に反逆意識と正統意識とが併存しえた理由を、系譜の内在的なものとして、ここで改めて考えなくてはならない。

この問いに答えるには「下国家譜」だけの検討では客観性に欠けると思われる。そこで、安藤氏の系図から一旦はなれて、第六天魔王にかかわる反逆の物語として知られる、東北奥浄瑠璃の田村麻呂物語「二代田村三代田村」[24]を検討したい。

三、田村麻呂物語の検討

「二代田村三代田村」の内、「三代田村」をとりあげる。研究史上、この物語は、朝敵たる第六天魔王の遣わした魔女「立烏帽子」（鈴鹿御前）が「日本国」の守り神となる（正統たる天皇よりも正統的存在となる）という朝敵認識の逆転現象がみられる物語と位置づけられている[25]。

---

[23] 祝儀としての百王については小峯『『邪馬台詩』の謎』（前掲）225 頁を参照。
[24] 『南部叢書』9 巻（南部叢書刊行会、1971 年）。
[25] 斉藤「中世エゾ観における『正統と異端』」（前掲）、入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」（前掲）。

まず、「三代田村」の内容について確認しておく。①観音菩薩の化身たる田村将軍が天皇の命を受け、立烏帽子を退治するために鈴鹿へ向かう。②立烏帽子は、夫の大竹高氏と共に日本を魔国とする魔女（天女）であった。だが、田村将軍に一目でひかれ、善心を抱くようになる。二人は契りを結び、娘をもうける。③天皇に忠義を尽くす田村将軍は、都へ跳び行く雁に天皇への手紙を託して、立烏帽子を鈴鹿から都へ誘い出し、退治しようと試みる。立烏帽子はその企みを知るも田村将軍の名誉を重んじ、ともに都へ向かう。④立烏帽子が内裏にて天皇と対面。そこで、自らの生まれが天皇よりも貴いことを主張し、天皇にその力を認めさせる。⑥田村将軍に大竹高氏退治の勅命がくだる。それに先立ち、立烏帽子が大竹の留守を狙って、大竹の砦に潜入。⑦田村将軍が砦に着いた時、大竹は天竺の第六天魔王と面会しており不在。立烏帽子が既に大竹の眷属を退治。⑧大竹が天竺から戻る。田村将軍は立烏帽子とともに大竹を倒す、となる。

先学が指摘するように、この物語では、反逆者たる立烏帽子の行為が結果として「日本国」を守る、すなわち天皇よりも天下を統治する君主としての役割を果たすことになるという点で、朝敵認識の逆転現象が生じている。

ただし、ここで立烏帽子が守った「日本国」というのは、天皇を正統な君主とする秩序そのものである。立烏帽子は、天皇を批判しながら、魔女としての力、欲望の天下統治権を行使して、それを守ったことになる。つまり、立烏帽子は天皇に対抗しうる欲望の天下統治権を有する第六天魔王の眷属としての力を、禁欲の天下統治権を有する天皇を支えるものに転じ、結果として、天皇を正統な君主とする秩序を守ったということになる。

この秩序を破壊する欲望の天下統治権を、禁欲の統治権者を支える構成要素へと転化させた契機は何であったか。それは、立烏帽子の田村将軍に対する愛情であった。誰かに従属するわけではない、立烏帽子が個人的な私欲に素直に従った結果､生じた感情であった。

そのような私欲に基づく感情の徹底化が、立烏帽子に善心を抱かせ、遂には彼女を、天皇を正統な君主とする秩序を維持させる、すなわち公――仏神に守られた「日本国」を中心とする天下という公――を維持させる有力な構成員へと転化させたと考える。

しかし、考えてみれば、人がただ私欲を徹底化しただけで、善心に基づく公的な存在になれるわけではない。それには変換器が必要であった。

そのヒントとなるのは田村将軍である。田村は天皇を正統な統治権者とする秩序を護持する将軍であっただけでなく、実はその秩序を護持する観音菩薩の化身でもあった。観音菩薩とは、衆生の求めに応じて種々に姿をかえる変化観音といわれる。人々の欲望に沿って本願をかなえてくれる万能の仏である。この禁欲の天下統治権者を守る仏の霊力が立烏帽子に私欲を徹した行為を促し、善心に基づく公的な存在へと転化させたと考える。

人が他者に従属せず、愛情などの私欲に基づく自由意志によって行動するにもかかわらず、それが結果として社会全体の公共に資することになる。このような逆転を成立させるには、人の様々な欲を受け止め、きめ細かな対応を行える君主あるいは代表者が必要となる。観音菩薩はそのようなことが行える君主や代表者の象徴や理想であったと考えられる。それは、天皇の祖たる天照が観音菩薩の化身ともいわれていた点[26]をふまえると、天皇にとっての象徴や理想（天皇が人々から期待される理想）もあったといえる。

このような「三代田村」でみられた論理を前提にすると、「下国家譜」に反逆意識と正統意識をあらわす内容が共存できた理由も明らかになってくる。それは、反逆意識＝欲望の天下統治権者としての意識が、禁欲の天下統治権者を支える強力な正統意識に転化しうると考えられていたからであった。いいかえれば、安藤氏の私欲に基

[26] 久保田収「伊勢神宮の本地」（『日本歴史』293 号、1972 年）、伊藤聡「中世神道説における天照大神」（『アマテラス神話の変身譜』森話社、1996 年、後『中世天照大神信仰の研究』前掲に収所）、佐藤弘夫『アマテラスの変貌』（法藏館、2000 年）などを参考。

づく自由意志こそが、天皇を正統な君主とする秩序を支える強い力となりうると考えられていたからであった。

天皇の従属者ではなく、それから自由な者が私欲に基づき行動することによって、秩序が維持され、社会の繁栄をもたらす。かかる論理を内包するが故に、「下国家譜」には、安藤氏が天皇を正統な君主とする秩序を支える正統意識をあらわす内容だけでなく、かつて朝敵として天皇に反逆した意識をあらわす内容をも必要としたのである。

さて、このような「私」の徹底化による公的存在への転化には、「三代田村」の場合、観音菩薩の力を必要とした。「下国家譜」では、それは何であったか。やはり観音菩薩であったと思われる。

注目すべきは、「長国」の項の前半にある「安陪仲丸」（安倍仲麻呂）伝承である（【表Ⅰ】を参考）。

【史料三】

長国安藤太

人王四十八代称徳天皇之臣安陪仲丸者、元来大和国安陪文殊堂前之商子也。依為才人被免殿上、賜安陪姓而後、任右大臣。四十九代光仁天皇御宇、宝亀十年、仲丸唐為舶論、於明州津被討而死。息男安陪広庭、為報父之仇、欲撃唐船人之旨、雖令奏、無勅許故、奉恨天子、馳下奥州。称下国、与干同姓一族、楯守出羽国仙北金洗沢之舘。其末孫安陪頼時、弥為朝敵振猛威於奥羽両州而、不随勅命、時安日長国同心而、推上京都、欲奉傾朝家之由、聞干華洛。於是将軍伊予守源頼義朝臣、蒙勅宣進発奥州。七十代後冷泉之御宇、康平五年秋、追討安陪頼時之子厨川二郎貞任、鳥海三郎宗任。是広庭之末孫也。

この史料の前半にみられる、入唐中の安陪仲麻呂が舶論で殺されたという「安部仲丸」伝承は、『江談抄』「吉備入唐間事」を下敷きにしているといわれる。実はそこに観音菩薩が登場する。

「吉備入唐間事」は、入唐した吉備真備が、唐人からその才を妬まれ、様々な難問を突きつけられるも、何とかそれを解決し、事な

きを得たという物語である。

まず、真備は唐人よって文選を読むよう、次いで囲碁を打うつよう命じられる。真備はこれらの課題に苦しむ。そこに、かつて唐人に殺され、鬼となった仲麻呂が登場する。真備は彼の助けを借りながら無事に課題をこなすことに成功する。だが次に、邪馬台詩を解読せよという難問を突きつけられ、仲麻呂も答えられなくなる。そこで、吉備は長谷寺観音と住吉神に祈る。すると、蜘蛛があらわれ、詩の上に糸を吐いたので、それを辿って、邪馬台詩を読解することに成功した、という内容である。

この伝説にて、最終的に吉備真備を助けたのは、鬼となった仲麻呂ではなく、蜘蛛を遣わした長谷寺観音と住吉神であった。つまり、欲望の天下統治権者たる魔王の一類＝鬼の仲麻呂ではなく、禁欲の天下統治権者を守る、長谷寺観音と住吉神が吉備真備を助けたのである。ここにも、反逆から正統への転換が図られていることが窺える。

これまでの研究でも指摘されているように、この「吉備入唐間事」と「長国」の項と密接な関係にある。このことを踏まえれば、「長国」の項には、安藤氏を反逆から正統へとうながす観音菩薩、さらには住吉神を初めとする仏神の存在が暗示されているのではないだろうか。ただし「長国」の項の後半は、安部仲麻呂の子孫が反乱を起こし、安藤氏が与同し、朝敵となったことが記されており、前半の安藤氏を反逆から正統へと導く観音菩薩の存在が無視されているように映る。しかし、それは「長国」の項にだけ拘った見方だといわねばなるまい。「長国」の項から後の記事を見れば、「長国」の項を最後に安藤氏の朝敵にかかわる記事はなくなるのであり、この項の次に「貞季」の項の短い記事を挟んで、「盛季」の項の「魔王百王説」となるのである。やはり「下国家譜」にも「三代田村」同様、私欲に基づく自由意志を、公的秩序を維持するものに転化させる仏神の力をみないわけにはいかないだろう。

これは朝廷を震撼させる強力な反逆者たちが「目に見えない」仏神の力によって滅亡させられ、かえって朝廷を支える役割を担わされることになるという軍記物の論理構造[27]と似ている。安藤氏や東北諸氏の系譜認識の研究でも別の視点からではあるが、安藤氏の系譜認識の背景として軍記物などの「語り物」文芸の影響が指摘されていた[28]。本稿で指摘した「下国家譜」や「三代田村」の論理と軍記物のそれとにも密接な関係を認めるべきだろう。

四、おわりに

まず、本稿で検討してきたことをまとめよう。

津軽・十三湊を拠点とし、北奥羽・蝦夷島を支配した安藤氏。この一族が残した戦国期から近世初期の諸系図のうち、松前藩家老下国家の「下国伊駒安陪姓之家譜」(「下国家譜」)には、天皇を正統な君主とする秩序に反逆する意識(朝敵意識)と、その秩序に廷臣として依存あるいは参与する正統意識という二つの相反する意識がみられた。

研究史上、「下国家譜」における安藤氏の反逆意識とは、(一)安藤氏の始祖を第六天魔王とする内容がみられる点(二)天皇家が百代で滅亡することを予言する「邪馬台詩」の百王説がみられる点にあるとされる。本稿では、「下国家譜」の反逆意識に関する記載を読み直し、正統意識と反逆意識という、相反する二つの意識が一つの系図に両立しうる論理について検討した。

その結果、(一)については、安藤氏が仏神に守られた天皇(禁欲の天下統治権者)よりも強力な、魔王の欲望の天下統治権を潜在的に有する者として位置づけられていたこと、(二)については、安藤氏惣領家の百代目の滅亡が描かれている点で、百王説は魔王の家系たる安藤氏にかかるものであること(魔王百王説)を指摘した。

それではなぜ「下国家譜」には、朝敵としての安藤氏の立場に関する記載がみられたのか。このことをさぐるために、同じく第六天

[27] 大津「軍記の始発」(『軍記と王権のイデオロギー』前掲)。
[28] 入間田「津軽安東の系譜と第六天魔王伝説」(前掲)。

魔王にかかわる反逆の物語として知られる奥浄瑠璃の田村麻呂物語「三代田村」を用いて検討を行った。この結果、天皇の従属から独立した者が、私欲に基づく自由意志を徹底化することで、観音菩薩を初めとする仏神の力によって善心を引き出され、結果として「日本国」を維持するようになるという、いわば反逆者が正統を支える論理がみられることがわかった。「下国家譜」に反逆意識と正統意識にかかわる記載が併存したのは、両記載がかかる論理を展開するために必要であるからであった。

さて、これまでみてきたように、天皇を正統な君主とする秩序にしばられない者が、自らの欲望に従ってとった行動でさえ、結果的にその秩序を利するものとなるという論理からは、天皇を正統な統治権者とする秩序を、人々の自由な活動に基づいて、維持し発展させるという国家論が見出せる。この国家論における人々は、天皇の禁欲の統治権に勝るとも劣らない力を潜在的に有する者であったという点で、いわゆる「主権者」とでもいいうるものであった。

かかる性格を有する存在が戦国時代の日本の「辺境」からあらわれたことにはどのような意味があるのだろうか。単なる偶然なのか、あるいは必然なのか。今後の課題としたい[29]。

【表Ⅰ】「下国伊駒安陪姓之家譜」（「下国家譜」）の概要（政季まで）

長髄	地神第五代鵜　草葺不合尊の御宇、欲界の第六天主他化自在天王（第六天魔王）、魔王の内臣にして二男の長髄を変化せしめ、豊葦原中津国を領さんと欲す。故に長髄、

[29] 今後は、類似する事例の比較検討が必要となってこよう。網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』（岩波書店、1984 年）、赤坂憲雄『王と天皇』（筑摩書房、1988 年）。三浦佑之「貴種流離譚と落人伝説」（赤坂憲雄他編『排除の時空を超えて』岩波書店、2003 年）。永井隆之『戦国時代の百姓思想』（東北大学出版会、2007 年）、永井・片岡耕平・渡邉俊『日本中世の NATION――統合の契機とその構造――』（岩田書院、2007 年）などを参照。なお現在、各種系譜における始祖の事例を収集し、これらに共通する性格について検討中である。この内容は、2010 年 8 月仙台開催のシンポジウム「神・王の呪縛――人々を統合するもの――」にて「神・王の社会的必然性」として報告した。

	下国と称し、第六天魔王孫と称す。云く、大日本国は欲界の下、我領地なりと。神武東征の折、大和国伊駒山にて神武天皇に捕えらる。死罪を赦され、名を醜蛮と改め、津軽外浜に流さる。安藤浦に蟄居するにより安藤太と号し、代々の通称となす。人王十六代応神天皇の御宇、安日と称し、日下と号す。
安国	安藤太。人王六十代醍醐天皇の御宇、延喜十九年、安国参内す。檜扇鷹羽を家紋とす。山王大明神を氏神とし、山王坊阿吽寺を祈願所とす。
国東	安藤太。人王六十六代一条天皇の御宇、長保元年、国東参内の時、安大納言を任ぜられ、東海日下将軍と号す。
長国	安藤太。人王四十八代称徳天皇の臣・安陪仲丸、右大臣に任ぜらる。四十九代光仁天皇御宇、宝亀十年、仲丸入唐。明州津にて舶論をなして殺害さる。息男広庭、父の仇として唐船を討たんと欲するも、勅許を得ず、天子を恨み、奥州に下る。下国と称し、同姓一族安日氏とくみ、出羽国金洗沢の舘に籠もる。広庭子孫安陪頼時、奥羽両州にて朝敵として猛威を振るい、勅命に従わず。安日長国、頼時に同心して、京に上り、朝家を傾けんとする由、京に聞こゆ。七十代後冷泉之御宇、康平五年秋、将軍源頼義、勅により、奥州に進発。頼時の子・貞任と宗任を追討す。
貞季	安藤太。人王八十二代後鳥羽院の御宇、建久三年、安日姓を改め、安倍とす。よりて、下国安藤太郎安倍貞季日下将軍外浜殿と称す。
盛季	安藤太。津軽十三湊。安大納言。盛季は長髄百代の後胤。婿の南部義政、謀略を廻らし、十三湊を攻破り、津軽を乗取る。嘉吉三年十二月十日、盛季、狄之島松前に逃渡る。

康季	十三湊盛季の子。下国安藤太。後花園院、文安二年、狄之島より津軽に渡入るの処、引根城にて病死す。南部の代官富士山城守、葬礼す。高山夷公大禅門と号し、般若寺を建立せしむ。
義季	安藤太。後花園院、享徳二年、津軽鼻和郡大浦郷狼倉舘に籠もるの処、南部の軍勢六千余騎に攻められ、生害す。
政季	潮潟重季（盛季四男道貞の子）の嫡男。安藤太。十三湊破滅の節、生虜となり、八戸にて安藤太と改め、田名部を知行す。その後、下国義季生害し、惣領家断絶す。蛎崎信広・相原政胤・河野政通ら相議し、享徳三年八月二十日、大畑より出船し、狄之島に住す。康正二年、秋田城介湊安倍堯季（盛季次男廉季の子）、下国政季を小鹿島に呼越し、謀略を廻らし、葛西出羽守を攻め、河北郡を知行す。

【表Ⅱ】「秋田家系図」の概要（政季まで）

孝元天皇	人王十八代。
大毘古命	安倍将軍。安倍姓元祖。
建沼河別命	安倍将軍。
安日王	安日・長髄兄弟、宇麻志摩治命を主君として摂津伊駒岳に住し、中州を領す。神武天皇、東征により長髄を射殺す。安日、死罪を赦され、醜蛮と号し、津軽外浜安藤浦に放逐さる。
安国	安日子孫。
安東	安日子孫。崇神天皇御宇、東北の夷狄、日東の地を侵凌す。勅により安倍将軍河別命をして追伐せしむといえども、夷狄強大にして官軍数多死す。安東、昔年に勅勘を

	蒙りて、北海の狄となりしも、この罪を赦しなば、逆徒を討たんと請う。勅許ありて、安東をして追伐せしむ。安東、凶賊を降し、麾下とす。ここに河別命、軍功を賞して安東に安倍姓を賜いて、将軍の同姓となす。安東、初めは安日を姓とするも、この時安倍に改む。将軍の印を賜り、東北の夷狄を守防す。
致東	応神天皇御宇、蝦夷反逆す。致東、追討す。賞によりて奥州日下将軍と号す。
長国	天平宝宇の頃、恵美大臣仲丸、使を奥州に遣わし、偽りて云く、我もと汝と同姓なり、帝都を辞して汝国に行かんと。長国、これを信ぜず、使を討殺す。後に叡聞に達し、賞禄を賜う。
高丸	一説に家麻呂。宝亀の頃、羽州鎮狄将軍。
安尭	延喜の頃の人。世の猛将となり、悪将と称す。
国東	一条天皇御宇、蝦夷発向して、日本地を侵凌す。国東、松前に渡りて、士卒を分け、上道・下道に向かう。強弓精兵をして、蝦夷の張本三四人を捕え、帰せり。蝦夷、赦され狄地に戻りしも、国東を懼れ、三年一度、土産を献ず。
頻良	（記載なし）。
頼良	後に時頼と改む。安東太郎、時に安倍将軍と称して、奥羽二州の押領使となる。
貞任	厨河二郎（頼良二男）。羽州雄勝郡厨河城主。永承五年、源頼義、後冷泉院の勅により、大将軍の印を受け、貞任を滅ぼす。彼の太刀を醍醐顕実上人に施与し、貞任の亡鬼を吊し、耳納寺を建立。国人、毎年その神を祀る。厨河の八幡と号す。
高星	（貞任二男）。三歳の時、乳母の懐にて津軽藤崎に逃る。
尭恒	藤崎領主。安東太郎。

貞秀	安東太郎。安東太郎を当家の仮名とす。祖父貞任の風儀ありて、勇敢の猛将なり。建久の頃、功によりて召さる。後鳥羽院朝に、檜扇鷲羽を賜り、家紋とす。庶子は檜扇鷹羽の紋。
堯秀	この時より初めて十三湊に住す。
堯勢	安東太郎。元弘年中に義貞に心中して、奥州に兵を挙ぐ。
貞季	安東太郎。
盛季	下国安東太郎。母は奥州の国司北畠顕家卿の女。
康季	下国安東太郎。法名鳳聚院高山賢機。奥州十三湊日下将軍。永享八年後花園院の御宇、勅命によりて若州羽賀寺を再興す。
義季	下国安東太郎。享徳二年卒。法名秀山玄泰。
政季	下国安東太郎。義季、嗣子なきにより、潮潟四郎（鹿季）の子・政季を養す。義季卒後、政季、幼若たるによりて、家臣蛎崎若狭守・相原国政をして近侍し、国政を行わしむ。長享二年卒。法名長香寺太岩宗広。

この表を作成するにあたり、平川新「系譜認識と境界権力」(『歴史学研究』六四七号、一九九三年）等を参考とした。

補注：「下国家譜」にみられる安日を魔王子孫とする言説については、「日本百姓縁起系図」が参考にされているとの指摘がある。佐々木紀一「安日説話の展開―真名本『曾我物語』揺蕩―」(『国語国文』75-12、2006 年)。

参考文献

伊藤聡（2011）『中世天照大神信仰の研究』法藏館
入間田宣夫（1998）『中世武士団の自己認識』三弥井書店
小峯和明（2003）『『邪馬台詩』の謎』岩波書店
新田一郎（1989）「虚言ヲ仰セラルヽ神」『列島の文化史』6 号
永井隆之（2007）『戦国時代の百姓思想』東北大学出版会

永井隆之・片岡耕平・渡邉俊（2007）『日本中世の NATION――統合の契機とその構造――』岩田書店
平川新（1993）「系譜認識と境界権力」『歴史学研究』647 号
弘前市史編纂委員会（1995）『新編弘前市史』資料編 1 古代・中世